常葉大学外国語学部紀要 〈報告〉
第35号　2019.3.　85頁～ 93頁

静岡市立図書館における多読支援の取り組み

―サービスラーニングの視点から―

良　知　惠美子

A Service Learning Perspective on Extensive Reading Support Activities at a Shizuoka Municipal Public Library

Emiko RACHI

2018 年 11 月 8 日受理

Abstract

多読は、教育現場から生涯学習へとその役割を拡大させている。筆者は2014年から静岡市立北部図書館（以下静岡北部図書館）で英語多読支援を行い、多読講演会に常葉大学の学生をアドバイザーとして参加させている。これは、大学での学びを地域へと還元することを通じて、より深い学びを探求するサービスラーニングの考え方に基づいている。本稿の目的は、多読アドバイザーとして参加した学生に対して実施したアンケートでの活動に対する「振り返り」の分析を行うことである。さらに、サービスラーニングでの学びは、大学生が自らを社会の構成員であることを自覚し、健全な市民として成長していくために必要であり、地域での学びを充実させていくためにも不可欠であること、そして、サービスラーニングという教育手法を今後正課教育課程に積極的に位置づけるべきであることの2点を主張したい。

キーワード：多読、サービスラーニング、公立図書館、生涯学習、振り返り

1．はじめに

常葉大学外国語学部英米語学科では、2011年から多読を１年次必修英語科目に導入し2018年で８年目を迎える。授業内多読と併せ外国語学習支援センターで支援を行い、多くの学生が順調に読了語数を伸ばし、多読を授業後も継続し英語学習の柱とするようになってきた。良知・柴田（2016）の研究で示した通り、導入当初の到達目標「100万語多読」へ向けての支援方法も、試行錯誤の中から次第に明らかになって来たと感じる。酒井（2002）において提案された多読に対して、辞書も使わずにただ読むだけの学習方法に一体どれ程の効果が期待できるのかと、当初懐疑的な印象をもつ英

語指導者が多数いたことは事実である。しかしながら、多読は英語のインプットが圧倒的に欠けていたこれまでの英語教育に一石を投じ、その教育的効果が次第に認められていった。2013年12月13日文部科学省から公表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の「新たな英語教育の目標・内容（案）」においては、「多読」という文言が採用され、公教育における多読の有効性が認知された。酒井・西澤（2014）では、多読の「とっつきやすさ」、つまり馴染みやすさゆえに、多読が短期間に日本の英語教育に受け入れられていったと説明している。

一方、この馴染みやすさの特性が、多読を教育現場から、さらに公立図書館を通じた一般市民の生涯学習へとその役割を拡大させている。これは注目に値する。英語多読は公立図書館を起点として生涯学習としての役割を担い始めているのである。筆者は、多読図書配架に際して選書の依頼を受けたのがきっかけで、2014年10月から静岡北部図書館で多読講演会の実施、多読サークルの立ち上げ等、多読を通じた支援を行っている。良知(2016)では、公立図書館での多読支援を生涯学習の一つとして支援していく方向性について触れた。教育機関での多読、生涯学習としての社会人の多読、これら二つの流れはそれぞれが独立しているのではなく、相互補完的な関係にあるべきだと筆者は考えている。そして、両者を結びつけるのが「サービスラーニング」という新しい教育手法である。今後、大学は積極的に地域の社会的活動に参加し、実践や研究で培った知識や技能を生かすことが求められる。中央教育審議会答申（平成14年7月29日）では、青少年を巡るいじめや引きこもりなどの問題を「奉仕活動・体験活動」を通じて解決しようとする姿勢を示し、大学や短期大学など高等教育機関において、学生が行う奉仕活動や体験活動を正規カリキュラムの中に取り込み、単位認定を行うことを積極的に推奨している。常葉大学においても、「大学が地域社会と連携しながら、地域の発展成長に貢献すること」、そして「地域社会の中枢を担うべき、有能な人材の育成に力を尽くす」ことが教育理念の一つとして謳われている。まさにこれを発展させ、学習カリキュラムの中に組み込んだのがサービスラーニングである。2018年4月静岡市草薙に移転した常葉大学（静岡キャンパス）には、地域連携センターが開設されたのも、上記答申で示された精神を反映したものであることは間違いない。残念ながら、本学ではカリキュラム内容にはサービスラーニングの考え方は未だ具体化されていない。しかし、学びの新しい形として今後ますます多くの大学で積極的に導入されていくはずである。

サービスラーニングは様々な領域と関連付けられるが、本稿の目的は、筆者が実践している静岡北部図書館多読支援に、多読アドバイザーとして参加した常葉大学学生4名の振り返りアンケートを分析することにある。さらに、大学生が自らも社会に生きる一人であることを自覚し、健全な市民となり成長していくべきであるという、サービスラーニングの精神に基づいた学びの手法が、今後正規教育課程の中に位置づけられるべきであることを主張したい。

２．サービスラーニングとは

２．１　これからの大学教育が育成すべき能力とは

まず、「サービスラーニングとは一体何か」という問いに答える必要があるだろう。まだ、その名称は日本の大学教育に浸透しているとは言えない。これまでの日本の大学教育で求めてきたものは、高度な専門知識を身につけ、それを社会に生かすという考え方であった。しかし、それはともすると講義中心の教育となり、学習者自らが授業に参加し問題を解決するといった、参加型授業が十分実施されていたとは言い難い。筆者が所属する常葉大学外国語学部英米語学科においても、これまでともするとただ黙々と講義のノートテイキングを行い、それで単位がもらえる授業に学生が集まりやすい傾向も見受けられた。これを受け、初年次教育として本年度から実施された外国語学部英米語学科の「教養セミナー」では、大学で能動的に学ぶことの意義や目的を明確にし、それを実践するため、アクティブラーニングの学習を取り入れ、グループ学習を中心に据えた発表形式の課題が学生に課された。

一方、「平成20年度文部科学白書第２章大学の国際化と地域貢献」において、今後大学は（１）グローバル化が進む社会において、国際的な競争力を高めること、（２）地域のニーズを踏まえた教育活動を行い地域に貢献していくこと、が求められている。国際化と地域貢献、これら2つは一見すると別々の方向性を示しているようだが、地方公共団体や企業と連携し、地域を活性化できる人材には、国際社会で活躍できる人材と類似した資質が求められる。日本私立大学協会による教育学術新聞オンライン（平成19年１月号）においては、これから大学生に求められる能力を、急速な社会のグローバル化という視点から、次のように述べている。

高度な専門知識や技術が、ますます求められるのは事実である。しかし、従来のような「知識の詰め込み」では充分ではない。専門知識が効果的に生かされるには、別の「能力」も不可欠なのである。例えば、社会のそれぞれの場で問題を解決に導く能力、リーダーシップ、創造性、コミュニケーション能力、共感力、創造力、語学力、広く深いグローバルな視野、高い倫理や市民性…これらも同様に重要視されるのである。日本人が往々にして苦手とされる能力であり、日本の教育システムが積み残してきた課題とも一致する。

ここで指摘されている今後学生に求められる様々な能力は、国際化と地域貢献、両側面で活躍できる人材に必要な能力なのである。まさにこれらの能力を育成するために効果的なのがサービスラーニングと言える。

２．２　サービスラーニングの基本的な考え方

サービスラーニングを取り入れ新しい大学教育に取り組んでいる筑波大学人間学群のホームページでは、「教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役

割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法」とその定義を示している。その歴史についても触れ、1967年ごろに「サービスラーニング」という言葉がアメリカで用いられるようになり、1990年「国家及びコミュニティ・サービス法」が制定されてから実際にアメリカ各地で実践されるようになったとしている。

サービスラーニングはこれまでの教育方法とどのように異なるのか。Lisa Gayle Bond（2018）は、Active LearningからEngaged Learningへと発展する流れの中に、サービスラーニングが位置づけられると説明している。先ず、Active Learningについては、

Active Learning is any teaching method that has students participating in the learning process.

と定義し、それが効果的であるとしつつも、実際に学習者が学びの場に常に携わっているのか疑問を投げかけたうえで、さらにEngaged Learningを次のように説明している。

Engaged Learning occurs when students have chances to use the knowledge learned in the classroom in real, actual environments.

Engaged Leaningとは、学習者が教室で習得した知識を具体的な現実の環境で使用する機会があった場合に生じるものであり、Engaged Learningの中にサービスラーニングが含まれるとする。

日本では、サービスラーニングの実践の歴史はまだ浅い。正課教育の中に位置づけられている大学はまだ数少ないのが現状である。多様な専門分野でサービスラーニングを実施できることは、その柔軟性を大いに示すものであるが、例えば、家政教育分野でのサービスラーニングの詳細については、田崎・増田（2018）を参照されたい。立命館大学は、平成17年度に「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」と題する現代GP（特色ある大学教育支援プログラム）に文部科学省から選定された。同大学は2008年にセンターを開設し今年で10年目を迎える。次章２．３では、立命館大学のサービスラーニング導入の歩みを紹介することにしたい。

２．３　国内のサービスラーニングセンター：立命館大学の活動

立命館大学サービスラーニングセンターホームページで、センターのミッションとポリシーをはじめ、センター開設までの過程を知ることができる。

サービスラーニングセンターのミッションには５項目が掲げられており、その中でサービスラーニングの普及に努め、調査、研究を行うことで学生のシチズンシップ（ボランティアマインド等）を涵養し、社会貢献・連携活動に関わる地域・市民・団体・機関とのネットワークを構築することを目指している。また、ポリシーにおいて

は、学生を「広い視野と見識を持つ地球市民」として育成し、「変化する地域・社会や地域コミュニティのあり方に常に関心を向ける」こと、そして「参加型学習によって専門学習やキャリア・パスへの接続がもたらされるよう、サービスラーニングやボランティア活動の機会を拡充する」ことなどが謳われている。今後社会が学生に求める多様な能力をサービスラーニングを通して育成し、期待される社会人として活躍できる道筋を用意する意識が強く感じられる。

立命館大学のサービスラーニングセンターは、阪神・淡路大震災発生後に学生が主体となって行われたボランティア活動が母体となっている。この活動を推進するコーディネーターの養成を目的としたプログラムが開始されたのが1999年である。2012年には、カリキュラム改革に伴って、サービスラーニング関連科目を教養科目の中に配置している。この時これまで行ってきた地域支援の活動を、正課教育として位置づけたと言えるだろう。

ホームページ内では、これまでに刊行されたニューズレター等を自由に閲覧することができる。今後多くの教育機関が単なるボランティア活動にとどまらず、深い学びを備えたサービスラーニングをカリキュラムの中に導入していくためには、非常に参考になる資料となっている。

３．常葉大学における多読を通じた地域支援

筆者は平成26年10月に静岡北部図書館から多読図書選書依頼を受けたのがきっかけで、多読支援を行っている。当初は図書館利用者が多読を始めるための基本的な内容を盛り込んだ講演会を随時開催し、その普及に努めてきた。その後、多読指導から利用者を中心とした多読サークルの開設にこぎつけ、現在は月１回（毎月第３日曜日）の割合で、利用者達が自ら「多読サークル」を運営している。また、会の運営に関する情報、例えば月例会のお知らせ、多読に関する新しい情報などをSNS（Social Network Service）を利用して発信している。一般利用者が多読サークルを運営する方式は、多読を導入する多くの公立図書館で始まっており、多読が息の長い活動として継続していくためには、利用者が積極的に多読の楽しみや問題点を共有する場を直接運営していくことが重要なカギとなっている。

筆者は、静岡北部図書館の多読サークルに参加しつつ、常葉大学の学生にも、これまでの多読経験を地域連携の視点で生かすことの重要性から参加を促してきた。まさにこれが、多読を通じたサービスラーニングの始まりであったと言える。

３．１　多読講演会への学生参加

今年度平成30年８月19日にも、多読初心者を中心とした講演会を静岡北部図書館で開催した。初心者といっても、既に多読を始めてかなりの語数を読了している経験者も含まれていた。参加者は21名であった。全体講演会の後、５～６人の小グループに分かれて、多読に関する質問、問題点を出しあった。経験者初心者それぞれが、新鮮な気持ちで多読に向き合うためである。このグループ活動に、初心者に対するアドバ

イザーとしての役割を目的として、常葉大学外国語学部英米語学科3年生2名、2年生2名の学生に参加を依頼した。学生の人選については、ある程度の読了語数があること、そして多読に楽しみながら取り組んでいることを選出理由とした。うまく多読が進んでいる状態と、うまく進まずに問題を抱え、それを何とか乗り越えながら多読を継続した学生達である。多読の継続には必ず壁があり、それをどのように乗り越えたのかが、図書館一般参加者への大きなサポートになる。また、その一方で、全く学習の枠を超えた環境で多読を始めた参加者と交流することで、新しい多読の魅力に開眼する学生もいる。途中で多読を中断していた学生の中には、この講演会でのサポート役がきっかけで再び多読に取り組み、その後卒業まで多読を継続して大きな成果を得た者もいた。学外での多読支援活動を通じて、自らの学習を振り返ることができ、これがサービスラーニングが学生に及ぼす効果の核心部分と言える。振り返りを通じて、多読支援活動がその後の学びにつながった例である。

今回支援に参加した4名の学生に、講演会終了後アンケートの記入を依頼した。次章3．2において、その内容紹介と分析を行う。

3．2　アンケートの実施と分析

多読講演会後、3年生2名、2年生2名に、アンケートの記入を依頼した。アンケート項目は以下の4つである。

①一般参加者の方々との座談会では、どのような質問がありましたか。
②今回の多読講演会に参加したことは、あなたの今後の（多読）学習にどのような影響を与えると思いますか。
③大学での多読学習と公立図書館を利用した生涯多読とでは、どのような類似点及び相違点があると感じましたか。
④大学で学習したことを地域の方々と共有することをあなたはどのように思いますか。

本稿では、サービスラーニングの視点から分析するために必要となる②と④の項目に絞って、内容の紹介及び分析とコメントを加えることにしたい。先ず②の項目について、学生からは次のような回答が得られた。

- 参加者の方々が様々なジャンルの本に触れていることを知り、今後自分の選書にもそれを生かしていこうと思った。
- 一般の方々の英語力は学生同様様々であり、多読は英語力を向上させていくための適応範囲が広い学習方法であると感じた。
- 一般参加者は自分よりも英語に対する興味関心が高いと感じた。多読の効果を実感し、今後ぜひ継続していくべきだと痛感した。
- 一般参加者の多読に対する真剣な姿勢に感心した。今後自分も多読のための時間を積極的に作りたいと思った。

多読支援者として多読講演会に参加したことが、大学での自分の多読学習方法を振り返ったり、その効果を改めて実感したりすることにつながっている。教室という閉ざされた空間では、問題が見えにくかったり、なかなか解決が見いだせなかったりすることが多い。今回のように教室を離れ地域に参加することで、自分が支援者という立場で異なる世代の人々と触れ合うことができ、学生にとっては大変新鮮であったに違いない。大学生が近隣住民と直接触れ合い言葉を交わす機会はなかなかないと思われるため、多読という共通の話題で異なる世代が向きあうことは貴重な機会となったはずである。さらに、これまで多読の効果に疑問を抱いていた学習者が、その否定的な思いを払拭し改める機会になったことが回答から感じられた。

④の項目は、大学での学びを社会の課題解決に生かすというサービスラーニングの基本的な考えかたに基づいたものである。学生からは次のような回答が得られた。

- 大学生として社会貢献をしなければならないと思う。英語学習を地域の方々と共有することで助けになれば是非協力したい。年齢や職業を問わず、純粋に英語を学びたいと思っている方々との出会いは貴重な経験だった。
- 年齢層も異なり、子供を持つ親という立場の方もいるので、自分とは異なる立場の人たちの意見や質問は大変勉強になった。
- 多読のことだけでなく、地域の人々との共有は必要だと思う。自分とは違う環境にいる人の様々な考えや意見を聞くことができた。

今回の多読支援活動により、地域の活動に参加し、地域を活性化していくための人材として、学生たちが自らの役割に目覚めるきっかけになったことを感じさせる回答が見られた。地域で学ぶ人たちの思いに共感し、それを後押しすることが自分達にもできる可能性があり、それを通じて市民性が育成され、地域が成長していく姿を描くことができるのではないだろうか。大学では、教員以外にはほぼ同年代の学生との接触しかない。大学生は、自分の居住地で家族以外の人々と話を交わす機会もあまりなく、積極的に地域の活動に参加することは稀である。しかしながら、人口減少を抱える地方都市では、若い世代がリーダーシップを発揮し、地域を支えていくことが今後ますます求められるだろう。

サービスラーニングには、活動後に「振り返る」作業が不可欠である。そして、それがどの様に活動後の学びに行かされたのかの検証も必要となる。これまでの筆者の多読地域支援活動にはこの部分が欠けていたことを、本稿の執筆を通じて痛感している。大学での学び、そしてそれを地域に還元し更なる自身の学びに生かしていくことが、サービスラーニングの一連の流れである。今回参加した学生達に、是非この点を検証するための調査を実施したいと考えている。

4．結び（サービスラーニングの導入に向けて）

今回のアンケート調査はごく小規模なものである。しかしながら、このような活動

を地道に継続し振り返りをしていくことが、地域を活性化できる人材を大学が輩出していくために必要である。そのためには、現在実施している地域貢献の学びを大学の正課教育のレベルに引き上げていかねばならない。地域と共に学び社会に貢献していく姿勢があってこそ、大学での学びは深まる。社会が抱える課題を理解しそれに取り組む学生を社会に輩出することが、今後果たすべき大学の役割であると筆者は考える。サービスラーニングによって、学生たちの学びは地域活動を通してより深い学びとなる。学生と市民との接触によって、大学と地域での学びが共に成長し、互いを促進できる好循環サイクルを創っていけば、また新しいエネルギーがそこに創造されていくはずである。常葉大学でのサービスラーニングプログラムの開設に向けた活動を、今後も継続していきたい。

参考文献

桑名恵（2014）. 学生の学びを超えた知己の学びとしてのサービスラーニング　立命館大学サービスラーニングセンターリレーコラム
www.ritsumei.ac.jp/slc/activity/column/detail.html/?id=15（参照2018年10月14日）

Lisa Gayle Bond（2018）. What is Service Learning『英語教育』 Vol.67 No.7, 60-61

文部科学省（2002）. 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（中央教育審議会答申）
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm（参照2018年10月20日）

文部科学省（2004）. 外国語教育全体の在り方、中学校・高等学校における外国語教育の在り方
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1388404.htm　（参照2018年10月20日）

文部科学省（2008）. 平成20年度文部科学省白書第１部第２章　大学の国際化と地域貢献
www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200901/detail/1283334.htm（参照2018年10月20日）

文部科学省（2013）グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf　（参照2018年10月27日）

日本私立大学協会（2007）. 教育学術新聞オンライン１月号
https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2258/3_4.html（参照2018年10月５日）

良知惠美子(2016). 生涯学習における多読に公立図書館はどのように貢献できるか

『常葉大学外国語学部紀要』(32) 73-79
良知・柴田（2016）. 大学英語多読教育におけるFalse Beginnersへの個別支援のありかた『日本多読学会紀要』9, 43-57
酒井邦英（2002）.『解読100万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま文庫
酒井・西澤（2014）.『図書館多読への招待』東京：日本図書館協会
田崎・増田（2018）. 家政教育が社会貢献に寄与するためのサービスラーニングに関する研究（第一報）サービスラーニング導入に向けた一考察　『静岡福祉大学紀要』14, 1-8
筑波大学人間学群（2018）. サービスラーニングの定義・歴史・役割 http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html r （参照2018年10月13日）